

|                  |   |
|------------------|---|
| <b>Title</b>     | 1.インターネット時代のさなかで：(財)電気通信普及財団寄付講座「インターネット時代の情報資源活用」の意義とその概要  |
| <b>Author(s)</b> | 河島，茂生   |
| <b>Citation</b>  | 聖学院大学図書館情報学研究，第6号 寄附講座「インターネット時代の情報資源活用」特集号，2011.3：7-13   |
| <b>URL</b>       | <a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3357">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3357</a> |
| <b>Rights</b>    |   |



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 1 インターネット時代のさなかで

## 一(財)電気通信普及財団寄付講座

### 「インターネット時代の情報資源活用」の意義とその概要―

河 島 茂 生

## 1. インターネット時代という背景

まず、本講座を開くにいたった時代の背景について述べたい。現代社会は、インターネット時代と呼ばれるが、この時代は3つ目の「りんご(apple)」によって引き起こされた時代といわれることがある<sup>1)</sup>。

人類の歴史は、これまで2つのりんごが時代を転換させるきっかけを作ってきた。1つ目のりんごは、アダムとイブが食べ、それによって楽園を追放されたりんごである。アダムとイブは、エデンの園という楽園に住んでいた。そして、そこでの暮らしはまったく不自由のないものであった。労働もなく、食事にも困らずいろいろな果樹を食べることが許されていた。ただ、善悪を知る木になっている実だけは食べてはいけなかった。ところが、アダムとイブはこの実を食べてしまう。俗説かもしれないが、その善悪を知る木になっていた実がりんごだったと語られることが多い。この実が本当にりんごだったとしたら、このりんごは、大きな人類のターニングポイントだったといえるだろう。というのも、このりんごを食べることによって、人類は楽園から追放されたからである。これが1つ目のりんごである。

2つ目のリンゴは、アイザック・ニュートン(Isac Newton)のアップルである。ニュートンは、いわずとしれた「万有引力の法則(law of universal gravitation)」を提唱した人物であり、ガリレオ・ガリレイ(Galileo Galilei)が亡くなった1642年に生まれている。そのことから、ガリレイの生まれ変わりとしてニュートンを表する人もいる。

そのニュートンは、1687年に『自然哲学の数学的諸原理』(*Philosophiae*

*naturalis principia mathematica*)という時代を動かす書物を刊行する。そのなかで提唱されていたのが万有引力の法則であった。星の軌道であれ潮の満ち引きであれ地上の物体の運動であれ、引力によって、すべての物体の運動が統一的に説明できるという考えである。これも俗説かもしれないが、この万有引力の法則の発想を導いたのが木から落ちたりんごだといわれている。このりんごは、新しい時代の幕開けを象徴するものであった。というのも、ニュートンが生きた時代あたりから、印刷技術によって人類の知識が精確に蓄積され、科学革命や産業革命が巻き起こることになったからである。

そして、現在は、3つ目のりんごによって引き起こされた時代であるといえるだろう。そのりんごとは、スティーブ・ジョブズ(Steve Jobs)やスティーブ・ウォズニアク(Steve Wozniak)が立ち上げたアップル社のアップル(りんご)である。アップル社は、GUI(Graphical User Interface)、つまりグラフィックでコンピュータを操作できる仕組みを社会に広めた。GUIにより難しいコマンドを打ち込まなくともコンピュータが操作できるようになり、これをきっかけとしてコンピュータが社会に普及することになった。そして、コンピュータ技術を使ったインターネットが多くの人に使われるようになってきているのである。

インターネット時代は、この3つ目のりんごの時代に位置する。現代社会は、人類史でいうと、3番目の大きな変革期の真ただ中にある。ダニエル・ベル(Daniel Bell)であれば「脱工業化社会(post-industrial society)」、アルヴィン・トフラー(Alvin Toffler)であれば「第三の波(The Third Wave)」と呼ぶであろう時代である。

現代社会にはさまざまな情報資源がある。冊子体というかたちをとった本もあれば、巻物もある。CDもDVDもBDもある。それらのほとんどが、コンピュータ技術やインターネット技術によって、作られ方が変わったりアクセスの仕方が変わったりして大きな影響を受けている。コンピュータ技術やインターネット技術を中心として、情報資源の再編が起きているのである。

たとえば、地図を見る場合を考えてみる。以前は、地図を見るのであれば地

図帳が頻繁に手に取られた。かつては、筆者も地図帳を広げてよく見たものである。引越しして新たな場所に住むとなると、地図帳がないと居場所の周辺がよく分からなかった。しかし、いま、ある場所の地図を見る時に、地図帳を広げることは少なくなった。インターネット上でGoogleマップ(<http://maps.google.co.jp/>)やMapion(<http://www.mapion.co.jp/>)などの地図の閲覧サービスが展開されており、検索語を入力したりドラッグしたりして詳細な地図を手軽に見ることができるからである。

こうした例は多数ある。天気予報もそうである。天気予報を知るのに、以前はテレビニュースのなかで流れる天気予報を見たものであった。筆者は、小さいころ祖母と一緒にテレビを見ていると、天気予報を知るために19時前に必ずNHKに番組を変更させられていた。ほかには、新聞の天気予報欄も以前は重宝されていた。しかし、現在は、インターネットを使って調べる人が増えてきている。天気は、カオス系であるので些細なことで激しく変動する。そのため、できるかぎり最新のデータを参照したほうがよい。インターネットは、マスメディアに比べて更新されたデータを瞬時に得やすい。また、知りたい場所の天気予報をピンポイントで細かく知ることができる。そのようなことから、インターネット上の天気予報が人気を集めている。

貴重書の閲覧にもデジタル化の影響が見受けられる。貴重書も、デジタル化されインターネットで遠く離れたところからでも閲覧することが増えてきた。以前は、厳重に管理された保管室に足を運ぶ必要があり、時間的な制約も大きかった。しかし、インターネット上で貴重書が公開されていれば空間的・時間的な制約が取り払われる。

インターネット時代は、コンピュータ技術やインターネット技術によってさまざまな情報資源へのアクセスの仕方が大きく変化している時代である。もちろん、アクセスの仕方だけではない。情報資源の作られ方や整理の仕方、保存の方法にいたるまで変化が訪れている。そしてそれらの変化は、これからも続いていくと考えられる。

こうしたインターネット時代のなかにあって、聖学院大学図書館情報学課程は、その社会に飛び込み担っていく学生たちにインターネット時代の情報資源を集中的に教育しなければならないと考え、本寄付講座を執り行うことになった。

## 2. 本寄付講座の枠組み

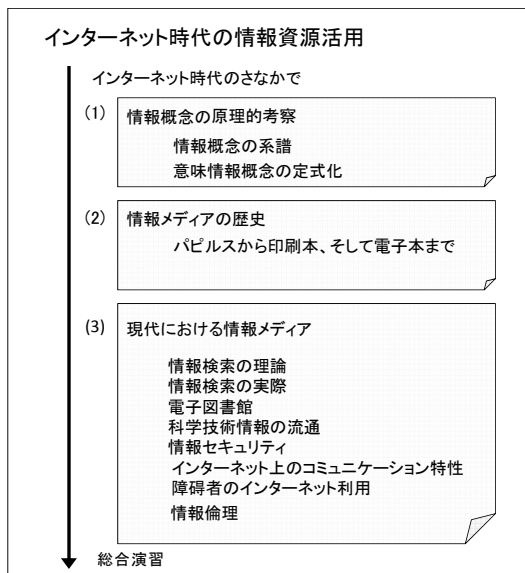


図1 本寄付講座の枠組み

次に、寄付講座の枠組みを説明しよう。本講座では、各分野で活躍する第一線の研究者を招き、インターネット時代の情報資源を多方面から考察する。本講座は、大きくわけて3つの段階から構成されている(図1)。第1段階目では、本講座の礎として「情報概念の原理的考察」をテーマとした。インターネット時代では、いかに情報を捉えるべきなのか、そもそも情報とはなにかを

議論する。第2段階目では、「情報メディアの歴史」を概観し、情報メディアの時間的なスパンを広く取った議論を展開する。つまり、情報メディアを歴史的な過程のなかに位置づけ、情報メディアがいかなる道を歩んできたかを説明していく。最後の第3段階目では、「現代における情報メディア」の課題をさまざまな観点から取り上げる。情報検索や電子図書館、科学技術情報の流通、情報倫理など、広範なトピックを扱う。

なお、本講座は、聖学院大学図書館情報学課程が主催するものであるが、インターネット時代の情報資源はなにも図書館という場だけに収まるものではな

い。そこで、図書館情報学を専門とする講演者だけでなく、それ以外の分野を専門とする研究者も交え、総合的に広い範囲からインターネット時代の情報資源について講義することになっている。

### 3. 各回の講義の位置づけ

本寄付講座は、筆者を含め13人の講演者が教壇に立った。前述した3段階の枠に沿って各講演者の内容をごく簡単に述べると、まず第1段階目の「情報概念の原理的考察」では、西田洋平講師(東京薬科大学)が情報概念の系譜を説明した。そのなかで、機械の処理する工学的な情報が意味を捨象したものであるのに対して、生命にとっての意味を含み込んだ情報概念の重要性が喚起された。続いて、橋本渉講師(淑徳大学)の講演が執り行なわれる。「意味とはなにか」を考えるうえで、哲学や言語学の学説史を探り「意味」の扱われ方が説明され、その後には情報学と意味との結びつきの話が展開された。

第2段階目の「情報メディアの歴史」においては、樫村雅章講師(慶應義塾大学)により、文字が刻み込まれる素材の変遷が語られる。文字は、紙だけでなく、古くから石、粘土、金属板、蠟板などに書かれ、パピルスや羊皮紙にも書きつけられた。そして、近年ではデジタル媒体にも記録されるようになっている。そうした歴史が振り返られた後、貴重書のデジタル化のトピックへと話が移っていった。

第3段階目の「現代における情報メディア」では、まず緑川信之教授(筑波大学大学院)から情報検索の理論的側面についての講演があった。検索が日常生活にありふれている事象であることが語られた後、情報はモノではないことが説明される。情報概念に関する捉え方では、認知的に情報を考える点で西田洋平講師や橋本渉講師が述べた情報概念と軌を一にしているといえるだろう。そうしたステップを踏まえて、情報検索の本質的なあり方に話は及んだ。次に安形輝准教授(亜細亜大学)によって情報検索の実際が説明された。インターネット利用で基本ツールとなっているサーチエンジンの寡占化やその動作の仕組みが

解説されて、その影響力が及ばす恐ろしさまでが指摘されている。

続いて、長田秀一教授(亜細亜大学)が電子図書館について語った。長田秀一教授によれば、電子図書館は、情報を得るために効率的な手法である。とはいえ、さまざまな限界があり、従来の図書館に取って代わることは決してできない。インターネット時代において、図書館があるべき姿が求められており、それは身体を介したものとなるであろう。長田秀一教授の講演は未来の図書館の方向性を照らし出すものであったといえる。

前田知子フェロー((独)科学技術振興機構)は、イノベーションを支える科学技術情報を中心に講演を行った。講演は、科学技術の位置づけから始まり、科学技術情報／科学コミュニケーションの定義とその意義、それから時代とともにいかに科学技術情報の流通が変化してきたのかを明らかにしたものだった。さらに、講演のなかで、インターネットを使った科学技術情報の流通は、利便性の向上を生んだけれども、現時点では種々の問題を抱えていることが指摘されている。

辻本篤研究員(東京大学大学院)からは、情報セキュリティマネジメントシステム(Information Security Management System)の話があった。図書館を含む組織はさまざまな情報を保持しており、その情報を適切に管理していく必要がある。おりしも講演が行われる前に、(株)三菱電機インフォメーションシステムズが開発・運営している図書館コンピュータ・システムの取扱いで不備が見つかり、個人情報漏洩した事件があった。そうした事件が起きないための仕組みづくりが解説された。

次に登壇したのは筆者である。インターネット上でのコミュニケーションは、人々の生活に密着したものとなっている。そのコミュニケーションの現況は実に多種多様であるが、「個人による発言権の保持」「心理領域／社会領域の乖離」「コミュニケーションの越境」「人間関係のありか」の4点に絞って説明した。

障害者のインターネット利用も進んでいる。インターネット時代では、ともすればデジタル・デバイドが拡大されてしまう。馬場寿実理事長(NPO法人

ハーモニー・アイ)・佐々木宗雅副理事長(NPO法人ハーモニー・アイ)を招いて、障害者がインターネットを活用する際に直面するさまざまな障壁や、配慮すべき点について議論する。

情報倫理の観点からの講演も竹之内禎特任講師(東海大学)によって行なわれた。インターネット時代を生きるにあたっては、善意から来るメールへの対処法を身につけ、また強大な力を維持しているマスメディア報道に関してリテラシーを養っておかなければならない。その基本的な姿勢についての解説がなされた。

最後に、若松昭子教授(聖学院大学)によって各講演の内容がまとめられ、寄付講座が締めくくられた。

次章以降、各講演の内容が要約されて収載されている。

### 注

1)Gassee, Jean-Louis. The Third Apple. San Diego, Harcourt, 1987, 212p.